

2023年2月12日（日）主日朝礼拝説教

『イエスを見たかった人』井上隆晶牧師
詩編34篇5～11節、ルカ福音書19章1～10節

①【イエスを見たいという強い願望】

エリコの町にザアカイという徴税人の人がいました。徴税人たちは占領国であるローマに代わってイスラエルの民から税金を集める仕事をしていましたから、同胞から嫌われ、仲間外れにされ、礼拝共同体にも加えてもらえませんでした。ザアカイはそんな徴税人の頭で、お金持ちでした。

このザアカイが、なぜか「イエス様がどんな人か見ようとした」というのです。それは、彼の心の奥に孤独から抜け出したい、人として愛されたいという望みがあったからだと思います。自分と同じ徴税人（マタイ）を弟子にしている人がいるという噂を聞き、そのイエスというお方に興味が湧いたのでしょう。遠くから眺めるだけでも良いと思い、イエス様を見るために出かけたのです。ところが現場に着くと「背が低かった」（19：3）ために群集に遮られて見る事が出来ませんでした。しかし彼の中の「見たい」という願望は治まらず、笑い者になってまでも望みを果たそうとします。彼は走って行って先回りし、子供のようにないちじく桑の木に登り、その葉の影からイエス様を見たのです。私はこの物語を読むと、エデンの園のアダムを思い出します。その昔アダムは神の顔を避けて、園の木の間に隠れましたが、ザアカイはその神の顔を見るために木に登りました。ここに人間の回復の始まりを見ます。ザアカイの背の低さは、私たちの弱さ、罪深さ、未熟さを象徴しています。しかしザアカイのどうしてもイエス様を見たいという望みは、彼の弱さを克服しました。私たちがどんなに罪深くて、それは神と出会うための障害になりません。本当の障害は、罪深さではなく「キリストに期待しない」ことです。

この物語には、「見ようとした」「見る事ができなかった」（3節）「見るために」（4節）「上を見上げて」（5節）「これを見た人たちは」（7節）と「見る」という言葉が5回も繰り返されています。「見たい」ということは「知りたい」ということです。人間の五感「視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚」はもともと、神を知るための道具として造られました。見て知る、聞いて知る、嗅いで知る、触って知る、食べて知るのです。しかしそれはいつしか神以外のもの（この世）に向けられるようになりました。修道士たちは「悪魔は穴が空いたところから入って来る」といいました。目からは汚れた映像、耳からは汚れた言葉、口からは過度の飲食が入って私たちの魂は汚れました。しかし「神も穴が空いたところから入って来る」のです。教会に来ると目からキリストの聖像イコンが入り、耳には賛美と祈りの声と聖書の朗読が入り、鼻には乳香の香り、口には聖体が入ります。教会に帰ると私たちの五感が神に向かって正しく用いられるのが分かります。私たちの魂は神のものが

入ることによって聖にされるのです。

●ホーソンという工場で、どうしたら労働者の意欲が増すかという実験をしました。温度や環境を変えても意欲の向上は見られなかったのですが、「皆さんは見られていますよ」と言ったら労働の意欲が上がったというのです。このことから人は、注目されている、誰かに見られていると元気になるというデータがまとめられ、それを「ホーソン効果」と言うそうです。

教会にはイコンがたくさんあります。イコンは目に特徴があります。こちらをいつも見ているからです。見られているから元気になるのです。詩編に「主を仰ぎ見る者は光と輝き、辱めに顔を伏せることはない。」(詩編 34:6)とあります。私たちは神を仰ぎ見ることの効果をあまり知りません。この世の物が自分を満たすと思って、神よりもこの世の物を何十倍も見ています。でも聖書は、主キリストを仰ぎ見る者は光と輝くと書かれているのです。この時、ザアカイの五感と全身は、この世ではなくキリストに向いていました。それを回心といいます。回心とは自分の過ちを悔いることではなく、私たちの全身(命)をキリストに向けることなのです。私たちの命は正しくキリストに向いているでしょうか？

②【ぜひあなたの家に泊まりたい】

やがてイエス様は木の下まで来ると足を止められ、上を見上げて言われました。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」(19:5) 驚くべきことは、イエス様の方からザアカイに声をかけられ、交わりを強く求められたということです。「泊まりたい」は英語では「I must stay」です。口語訳だと「泊まることにしている」、フランシスコ会訳は「泊まりたいのだ」、正教会訳は「泊まるべし」です。イエス様のとても強い願いが現れています。ザアカイ以上に強い願望です。イエス様はザアカイの名前を知っておられました。それだけでなく、彼がどんな人間か、どんな罪を犯したかをすべて知っておられたことでしょう。知っておられながら彼との交わりを強く求められたのです。そのしるしとして「今日は、ぜひあなたの家に泊まる！」と言われるのです。ザアカイは自分が望む以上に、イエス様が自分を望んでおられたことを知りました。自分が知る前から、自分は知られていたことを知りました。

イエス様はここにいる私たちにも「ぜひあなたの家に泊まる！」と言われます。「神をお迎えするには私の心は汚れすぎています」と思うことがあります。それでもイエス様に自分のありのままを見てもらいましょう。親友に相談するように、イエス様に心を開いて話しましょう。私たちが望む以上に、「私はあなたの親友になりたい」と、主が強く望んでおられるからです。この事は私たちに勇気を与えてくれます。ザアカイはものすごくうれしかったと思います。彼は急いで木から降りてきて、喜んでイエス様を家に迎え入れました。

③【失われたものを捜して救うために来た】

ザアカイは求められていないのに、立ち上がりイエス様に言いました。「私は、財

産の半分を貧しい人に施します。また、誰かから、何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」(8節) ユダヤの律法では、盗んだ物を返すときは二倍でした。ところが彼はそれを四倍にして返すと言いました。しかも財産の半分を貧しい人に与えますというのです。それほどイエス様との出会いは彼を満たしてしまいました。彼の喜びが伝わって来るようです。

イエス様は言われました。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」(9～10節) イエス様はザアカイのことを「失われたもの」と言いました。「失われたもの」とは、ある物が本来あるべき所から離れ、誤った所に置かれていることをいいます。人は神から離れている時、失われているのです。ザアカイは正しい場所に戻ったのです。あなたはどこにいますか？

●石川県小松市郊外の木津村に方角定次郎(ほうがいていじろう)という漁師がいました。ある冬の夜、ワカサギ漁をしていたのですが一匹も獲れませんでした。明け方に網を上げると、青い表紙の小冊子が二冊入っていました。本の表紙にはヨハネ福音書と書かれていました。変な本だなーと思って読んでみると「私は漁に行く」(ヨハネ21:3)と書いてあるので、漁の本かと思い読んでゆくと「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば取れるはずだ」と書いてありました。そこで彼も右側へ網を打つと、大漁の時の五倍のワカサギが獲れました。彼は大漁に驚き、家に帰って聖書を読みました。その頃、この小松市に、升崎外彦牧師が、毎晩路傍伝道をしていました。彼は雨の日も雪の日も街頭に立って3年間キリストの話をしました。定次郎はその噂を聞いて、10キロの道を歩いて毎晩、その話を聞きに行き、ついに信仰に入ったそうです。

昔は、すごい人がいたものだと思います。升崎牧師は三年間、雨の日も雪の日も神の子を捜し求めたのだと思います。もし、彼がやめてしまえば、定次郎は救われなかったかもしれせん。

イエス様は「人の子は、失われたものを捜して救うために来た」と言われました。紛失物は自分では主人の元に帰ることができません。同様に、神から失われた人間は自分で戻る事が出来ません。私たちは自分で戻ったものではありません。キリストが私たちを捜して下さり、戻して下さったのです。イエス様はエリコの町に来るたびにザアカイを捜していたのだと思います。「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい!」という言葉は「今日こそは泊まりたい!」というように聞こえます。ザアカイはその後、ペトロの弟子となり、カイザリアの主教になったそうです。イエス様はどれだけ私を捜されたのでしょうか? 私たちを本来いるべき場所に戻すために、私の知らないところで主は大変なご苦労と、時間の無駄遣いをしてくださいました。ものすごい犠牲があったのだと思います。私を捜している方がおられる、私を知っておられ、私の友になりたいと熱望される方がおられるのです。それをしっかり知って帰りましょう。